

日本中世集落における 短冊形地割の考古学的研究

Archaeological Research on Rectangular-Pattern Land Allotment
in Medieval Japanese Settlements

前川 要

はじめに

①事例研究

②考察

③結語

おわりに

【論文要旨】

本論における課題は、近年、日本全国で発掘調査されつつある中世の都市的集落に顕著に見られるいわゆる短冊形地割の成立と展開を計量的手法を中心に分析することにある。研究史的には、歴史地理学の小林健太郎、建築史学の玉井哲雄などが論じてきたが、その規定や性格については未だ不明確である。本稿では、近畿地方において発掘調査された資料を基本に短冊形地割の面積を中心とした計量的分析を行った。その結果、大きく二類型存在することを確認できた。それは、奥行きが短いものと長いものである。前者を福井県一乗谷朝倉氏遺跡に典型例が見られることから一乗谷型、後者を広島県草戸千軒町遺跡に典型例が見られることから草戸型と呼称した。これらが生じる社会的背景には、大きな相違点が存在する。いずれも古代都城から出発して、そして中世における集村に起源をもつと考えた。集落の方向性には三つあり、そのうち一乗谷型が居館化（Ⅰ類）という方向性、草戸型が都市化（Ⅲ類）という方向性の中でそれぞれ生じてくることが判明した。特に、一乗谷型については、京都における階層別の屋敷地付与の事例から類推して、「方形館体制」という室町幕府守護体制を基本とした階層制の基底部において、中世の屋敷地が階層分化する中で出現したと想定した。従来言われている、小島道裕による戦国期城下町の二元性についても、二つの類型化によって整合的に説明ができる。つまり、前者が城下町内におけるありかた、後者が城下に隣接する市町のありかたである。さらに、東国の宿においても、同じ様相が指摘でき、前者が内宿、後者が外宿におけるありかたである。